

神道史上における 沖島の祭祀

今和二年一月十八日
福山林健

- 空間と地域
 - △その1. 岡の梶主献上の魚塩の地
 - △その2. 対馬の渡り海の中道一直進海路

- 祭祀の分類
 - △祈願
 - △奉養
 - △祓
- 日本的 神-人間-迹 神
 - △神饌と幣帛(奉納品)

- まつりと神道
 - △神と人
 - △岡梶主と宗像氏

八年春正月、己卯朔、壬午、(四)筑紫に幸す。時に岡縣主の祖熊鰐、天皇の車駕を聞りて、豫て五百枝賢木を抜取りて、九尋船の舳に立てて、上枝には白銅鏡を掛け、中枝には十握劍を掛け、下枝には八尺瓊を掛けて、周芳の沙塵之浦に参迎へて、魚鹽の地を獻る。因りて奏して言さく、穴門より向津野大済に至るまでを東門と爲し、名籠屋大済を以て西門と爲し、没利嶋、阿閉嶋を限りて御宮と爲し、柴嶋を割きて御廄と爲し、逆見海を以て鹽地と爲さむと。既にして海路を導きまつりて、山鹿岬より廻りて、岡浦に入りませ。水門に到りて御船進くこと得ず。則ち熊鰐に問ひて曰はく、朕聞く、汝熊鰐は明き心有りて参來けり。何ぞ船の進かざる。熊鰐奏して曰さく、御船進くこと得ざる所以は臣が罪に非ず。是の浦口に男女二神有す。男神をば大倉主と曰ひ、女神をば菟夫羅媛と曰ふ。必に是の神の心かとまをす。天皇則ち、禱祈みたまひ、挾抄者倭國の菟田の人伊賀彦を以て祝と爲て祭らしめたまふ。則ち船進くことを得たり。皇后は別船にして、洞海より入りたまふ。潮涸て進くことを得ず。時に熊鰐更に還りて、洞より皇后を迎へ奉る。即ち御船の進かざるを見て、惶懼りて、忽に魚沼・鳥池を作りて、

悉に魚鳥を聚む。皇后、是の魚鳥の遊ぶを看そなはして、忿の心稍に解けたまひ、潮の満つるに及びて、即ち岡津に泊りたまふ。又筑紫の伊賀縣主の祖五十迹手、天皇の行すと聞りて、五百枝賢木を抜取りて、船の舳に立て、上枝には八尺瓊を掛け、中枝には白銅鏡を掛け、下枝には十握劍を掛けて、穴門の引嶋に参迎へて獻る。因りて以て奏して言さく、臣敢へて是の物を獻る所以は、天皇八尺瓊の勾れるが如くに、曲妙に御宇せ。且白銅鏡の如くに、分明に山川海原を看行せ。乃ち是の十握劍を提げて、天下を平けたまへとなりとまをす。天皇即ち五十迹手を美めたまひて、伊蘇志と曰ふ。故れ時人、五十迹手が本土を號けて伊蘇國と曰ふ。今伊賀と謂ふは訛れるなり。己亥、(二十)儼縣に到りまして、因りて檀日宮に居します。秋九月、乙亥朔、己卯、(日五)群臣に詔して熊襲を討つことを議らしめたまふ。時に神有して、皇后に託りて誨へまつりて曰はく、天皇何ぞ熊襲の服はざることを憂ひたまふや。是れ背穴の空國ぞ。豈兵を擧げて伐つに足らむや。茲の國にも愈れる寶國有り。譬へば美女の隊の如き向津國有り。眼炎耀く金銀彩色、多に其の國に在り。是を梓衾新羅國と謂ふ。若し



対

馬

東

水

道

玄界灘

響灘

周防灘

2

三野連 名 闕 入 唐 時 春 日 藏 首 老 作 歌

この題詞の右に西本願寺本などには次の如き朱の書入がある。

國史云大寶元年正月遣唐使民部卿粟田真人朝臣已下百六十人乘船五隻小商監從七位下中宮小進美奴連出唐云々
とある。現在の國史には靈龜二年正月の條に美努連阿麻呂從五位下を授くとあるのみであるが、この人の墓誌が明治五年に奈良縣平群郡萩原村(今の生駒郡生駒町)から發掘せられた。それに、

我祖美努距萬連飛鳥淨御原天皇御世甲申年正月十六日勅賜連姓。藤原宮御宇大行天皇御世大寶元年歲次辛丑五月使乎唐國。平城宮治天下。大行天皇御世靈龜一年歲次丙辰正月五日授從五位下。任主殿寮頭。神龜五年歲次戊辰十月廿日卒春秋六十有七。云々

とある。銅版に刻されたもので、天平二年十月廿日の日付がある(『續古京道文』に收められ、山田孝雄博士の解説がある)。右の題詞には「三野連」とのみあつて、「名闕」と注してあるが、その注は他の左注同様後に加へたもので、右に引用の美努連阿麻呂の事と認められる。

「入唐」の語について、考別記に「大内へまゐるを人といふにならひて、さらぬ宮などへもあがめて入と書しとおぼしき、集に一つ二つあり、然るをから國へ行を入といふはひがこと也……此集の端詞は、みだりに他國たふとみする人の書し文にならひて、おのづからしか書しもの也」と注意してある。遣唐とか渡唐とかいふのならわかるが、入唐といふのは本末を誤つた言葉だといふのである。この時の遣唐使任命の事は續紀、大寶元年二月の條に見える。出發の事は翌二年六月の條に「乙丑(廿九日)遣唐使等去年從筑紫而入海。風浪暴險不得渡海。至是乃發。」とある。「春日藏首老」は既出(三三)。右の美努連が出發にあつてこれを送る作である。

ニ 在根良 對馬乃渡
ワタナカニ 幣取向而
ハナカヘリコト 早還許年 (元)

【口譯】 島山の目に立つ對馬の海路 その海上に幣を手向けて、無事に早く歸つてらうしやうませ。
【訓釋】 ありねよし——致證に「在根の在は借字にて、荒る意にて、荒磯といふと同じく荒根にて、根は島根、岩根などの根にて、次に對馬とらへば、こゝには島をはぶきて、たゞ、ねとのみいひて、島根の事」と述べてあるが、荒磯の場合はインとつゞく爲にラガリと轉じた事が認められるが、荒妙、荒津、荒野などイ段以外の語につゞく場合はいづれもアラとあるので、「ありね」を荒根の意に解く事穩かでない。また「ねとのみいひて島根の事」といふも無理であらう。「杯尔多都久毛」(十四・三三)は「嶺に立つ雲」であり、殊に、

對馬のねは下雲あらなふ上のねにたなびく雲を見つゝ思はせ(十四・三三)
の例を見てもわかるやうに、「ね」は嶺の意にとるべきであらう。極の楯には「彼島に有明山と云高山在と云、それをあり峯と昔は云し歟、……又在は荒の假言にて荒峯よしと云事歟」とも云つてある。あり嶺がありあけ山となつたと見る(楯手も同説)も推定にすぎず、「在」の字をアラの假字に用いた例も集中にならぬ。この「あり」は「阿理袁能 波理能紀能 延陀」(雄略記)の「あり峯」の「あり」と同じものと思はれる。その「あり」の意については、右の荒の意とするもの他に、あらはれたるをいふ(講義所引品田太吉氏説)とするものと、存在の意とするもの(全註釋)とがある。あらはる、生の、の意の「ある」(三三)と存在の意の「あり」とはもと同根の語と思はれ、「ありあり」(分明)の語にも兩者の共通性が考へられ、「あり通ふ」「あり待つ」「ありわたる」などは存在の意に用ゐられてあるが、今の場合は「目に立つ」といふ程の意に解すべきでないかと思ふ。「よし」は青丹よし(二七)、朝もよし(三三)などの「よし」と同じ。對馬は朝鮮との往來の海中にあつて有明山などの山が海路の目しるしに注意せられたので「あり嶺よし」と呼んで對馬の枕詞としたものである。

對馬の渡——對馬は古事記國生みの條に「次生津島。亦名謂天之狹手依比賣」とある。舟の着く津の島の意。日本書紀には「對馬嶋」とある。魏志倭人傳にも「至對馬國」の文字が見える。支那で既に用ゐられてゐた文字と思はれる。渡は「許我能和多利」(十四・三三)などあつてワタリと訓んで、渡るところ。後世のワタシで、海にも河にもいふ。ここは對馬にわたる海路。今も壹岐との間を對馬海峡と呼んでゐる。そのあたりをさしたものであらう。

海中に——海をワタと呼ぶのは渡りゆくところの意かと思はれる。對馬海峡のあたりの海上に、の意。
幣取りむけて早歸り來ね——「幣」の字、元曆本に「幣」とあり、寛永本などには「幣」とあるが無點本に「幣」とあるによる(三三)。神に幣を取り手向けて、海路の無事を祈つて、早く歸つてらうしやう、の意。(三三)参照。「幣」は神に手

向ける絹、紙などの類。「來ね」の「ね」は相手に求める意の助詞。既出(二二)。
【考】 遣唐使任命は題詞の條で述べたやうに大寶元年二月であるので、古義には(三三)の前にこの作を移してあるが、それはみだりであつて、年代順といふ事は、さう正確にはなされてゐない。それに實際の渡海は大寶二年二月であり、又次の作と類を以て並べたとも考へられるからこの位置にある事を不當とすべきではない。
荒津の海われ幣奉り齋ひて早歸りませ面變りせず(十二・三三)
とあるは遣唐使を送る作ではなからうが、類想の作である。

萬葉集注釋 卷第一 定價二八〇圓
昭和三十三年十一月十日 初版發行
昭和五十七年十一月二十日普及版印刷
昭和五十七年十一月三十日普及版發行
著者 澤 鴻 久 孝
發行所 高 梨 茂
印刷者 山 田 博
發行所 中央公論社
〒東京部中央區京橋二丁目一七
編者東京二二三四
印刷所 中央公論社

◎美努岡万墓誌
奈良県生駒市萩原町出土 一面

銅製 鑄造
縦二九・七 横二〇・九
奈良時代 天平二年(七三〇)
東京国立博物館

第八次遣唐使の一員として唐に渡った美努岡万(続日本紀)では美努連岡麻呂の墓誌である。明治五年(一八七二)に生駒山東麓の丘陵地から土取り作業中に偶然掘り出されたという。やや幅の広い長方形の銅板で、銘文は表面だけで完結し、裏面は無地である。表面一杯に縦横の罫線を引き、一行に十七字の本文を十行、製作年を記した一行を加えて全十一行、合計百七十三字を整って刻んでいる。

銘文は「我が祖、美努岡万」で始まり、前半部では岡万の経歴を挙げ、後半部は人柄や功績を「孝経」に基づく美辞で称え、「仍て斯の文を作り、墓中に納め置く」と結んでいる。岡万は六十七歳で没したと記している。前半部に列記されている経歴を逆算するならば、連姓を賜ったのが二十三歳(甲申年)天武十三年(六八四)、遣唐使に任命されたのは四十歳(大宝元年/七〇一)、従五位下を受け、宮内省主殿寮の長官となったのは五十五歳(霊龜二年/七一六)となる。なお、岡万の乗った遣唐使船が日本を出帆したのは翌大宝二年(七〇二)のことであった。執節使に粟田真人、少録として山上憶良がおり、大安寺僧の道慈もこの使節に同行して留学をしていた。また、岡万の出発を見送る際に春日藏首老がうたった歌「ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向けて早帰り来ね(対馬の渡りの海にぬさを奉り、安全に航海をして早く帰ってきて下さい)」が『万葉集』に残されている(六十二番)。

岡万が帰国した年は知られていないが、従五位下を受けた霊龜二年(七一六)以前には戻っていたはずであり、出帆後二年で無事に帰国した粟田真人の船(七〇四)か、五年後に着いた大位の巨勢邑治の船(七〇七)のどちらかに乗船していた可能性が高い。

銘文の後半部にみられる「孝を移して忠となす」や「名を揚げて親を顕はす」などの美辞は、忠孝を旨とする『孝経』に親しんだ撰文者の教養がうかがわれる。冒頭に「我が祖」と書き出すことから、この墓誌を作らせたのは岡万の子と思われ、一族の中国文化への造詣がここに表明されている。

昭和五十九年(一九八四)、墓誌の出土地が発掘調査され、大量の木炭と共に岡万のものと思われる焼骨の一部が見つかった。茶毘の後に築かれた小さな火葬墓中にこの墓誌は添え置かれたのであろう。実態の明らかな唯一の遣唐使の墓地である。

(吉澤)

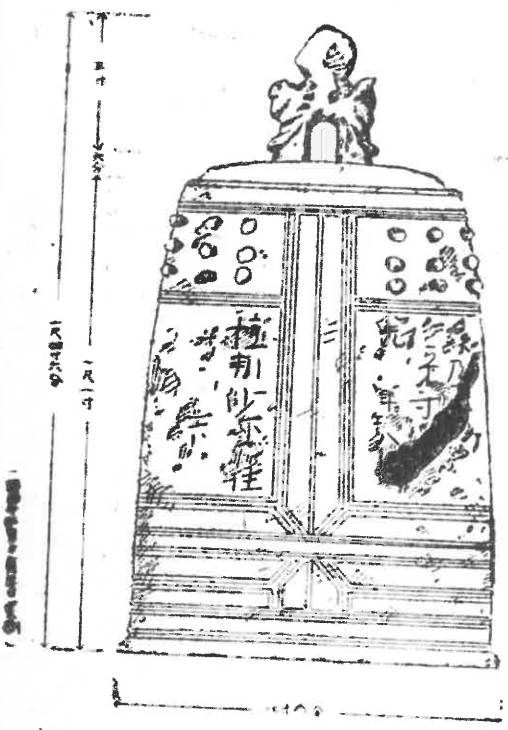


大遣唐使展

平城遷都一三〇〇年記念
編集 奈良国立博物館
デザイン・制作 DNPメディアクリエイト関西
装丁デザイン 水野デザイン室
印刷 大日本印刷
発行 奈良国立博物館
成書新聞大阪本社
NHK
NHKネット出版

二 出現鐘に就て

本鐘は全面縁錆に覆はれ其の腐蝕の度相當高きものであり、従つて池の間に刻せられた銘文も殆ど讀解し難い状態にある。且其側面には斜に大きい破損孔が存し、又何時の頃か其の面を削つて見たことがあると思はれ一側面に於て斜に撞座を含み大きく削つた状態が見られる。總高一尺四寸六分あり、龍頭高三寸、笠形六分、鐘身一尺一寸である。口径八寸八分、口縁に於ける鐘の厚さ七分、胴部破損孔に於ける厚さ一分五厘を示して居る。上帯及下帯には紋様を全く缺く。撞座は龍頭長徑の延線の方向に存する。普通に見る如く二箇あつたものと思はれるが其の一方は撞座を含み斜に大きく削られた爲撞座が全く失はれて居る。殘る一方の撞



第一圖

座は鐘面から盛上ること極めて少く、殆ど盛上りを感じない程度である。其の下半部は磨滅し殆ど細部を見ることが出来ず僅に上半部に於て其の状態を見るに過ぎない。子房は大きく内に九箇の蓮子を有するらしく、子房の周には短い雄蕊を表はし、花瓣は一枚の子葉を有する十六瓣であるらしいが先端の反轉は明かでない。撞座中心から口縁までの高さは二寸八分で鐘身を一〇〇とした高さは二五・四五を示し大體四分の一強の位置にある。乳は三段三列に配置せられて居るが其の大部分は腐蝕の爲明確なる形態を示さず、中には失はれたものさへある。龍頭は總高に比して高く、其の五分の一に當る。腐蝕の爲細部の觀察は全く不可能であるが寶珠が特に高く突出して居ることは注目すべき形である。銘は池の間に刻まれてあることがわかるが其の面は腐蝕甚しく文字の殘存状態極めて不良である。

右の如く極めて少數の文字を見得るに過ぎない。

- (第一區) …… 經 …… 神 ……
- (第二區) …… 乃 …… 平等 …… 元□□年子八月 ……
- (第三區) 檀那沙彌□性 ……

本鐘は全體の形から直ちに古鐘であることをうなづき得るが如何せん紀年の刻まれた分不明瞭の爲確實に之を證し得ないのは惜しい。後述する如く内部に封入せられたる寫經も亦鎌倉期の筆蹟であるから之を考へ合せて鎌倉期の鐘としてよいと思ふ。縁起に依ると發見當時は明かに「元徳二年庚子八月七日八日彼岸中日供養」と讀まれ

たとあるが此の點は古鐘銘の例から考へて疑はしいものであるが殘存文字によつて考ふれば「元」の一部を殘存すると見られ、「年」の下半部と干支の「子」及「八」は讀まれる。然らば「元徳二年庚子八月」迄は多分あつたものと思はれ、もとは之が明に讀まれたものであらう。本鐘は極めて小形であり此の點に於て珍とすべきであるが鎌倉期の古鐘として二尺以下のものは次の如くであるから本例は最小のものから第二位に位置するものと言ふ事が出来る。

龍頭の形態が多くの鐘と異ると見られるが寶珠が特に高く突出するものは千葉縣長生郡長柄村胎藏寺鐘に類似が見られるが細部不明のため果して胎藏寺鐘と全く同じ様であつたかどうかは明かでない。銘文に至つては全く讀めないと言つてよいが之を多くの此の時代の例に比べて第一區には奉納せられた社寺の所在地と社寺名並に願文が刻せられたと思はれるが池の間の狭さから考へ第一區には所在地と社寺の名を以て大部分を滿したと思はれる。第二區に「…乃…平等…」とあるに依れば此の部に願文のあつた事は明であり、第一區の後半部から引續いて第二區に記されたとする事が出来やう。紀年は元號、年、干支、月日等が記されるものであるから傳へられる如く「八月七日同八日彼岸中日供養」とあつたと言ふ事は疑はしいが「元徳三年庚子八月□日」とあつたとしてよいであらう。第三區には願主、鑄工等を記してゐた筈である。「檀那沙彌□性」が讀まれ其の左方にも尙刻まれてゐる名が見られる。封入法華經奥書に見ゆる沙稱了□と同人であるとするれば「檀那沙彌了性」となるわけである。鑄工名は不明である。

46 今見てぞ身をば知りぬる住の江の松より先に我は経にけり
こゝに、昔へ人の母、一日片時も忘れねば詠める、

47 住の江に船さし寄せよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく
となむ。うつたへに忘れなむとはあらで、恋しき心地しばし休めて、またも
恋ふる力にせむ、となるべし。

かく言ひて、眺めつゝ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げどもく、後方
退きに退きて、ほとくしくうち嵌めつべし。楫取の言はく、「この住吉の明
神は、例の神ぞかし。欲しき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて、
「幣を奉り給へ」と言ふ。言ふに従ひて、幣奉る。かく奉れども、もはら
風止まで、いや吹きに、いや立ちに、風波の危ければ、楫取また言はく、「幣
には御心の行かねば、御船も行かぬなり。なほ、嬉し、と思ひ給ふべき物奉り
給へ」と言ふ。また、言ふに従ひて、いかにせむ、とて、「眼もこそ二つあ
れ、たゞ一つある鏡を奉る」とて、海にうち嵌めつれば、口惜し。されば、
うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、ある人の詠める歌、
48 ちはやぶる神の心を荒るゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな
いたく、住の江、忘れ草、岸の姫松などいふ神には、あらずかし。目もうつら
く、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取の心は、神の御心なりけり。

十二日。雨降らず。ふむとき、これもちが船の遅れたりし、奈良志津より室津
に來ぬ。

十三日の曉に、いさゝかに雨降る。しばしありて止みぬ。女これかれ、「沐浴
などせむ」とて、あたりのよろしき所に下りて行く。海を見やれば、
17 雲もみな波とぞ見ゆる海人もがないつれか海と問ひて知るべく
となむ歌詠める。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗りはじめし
日より、船には紅濃くよき衣着ず。それは、「海の神に怖ぢて」と言ひて、
何の葦蔭にことづけて、老海鼠のつまの貽貽、貽貽をぞ、心にもあらぬ蔭に上

土佐日記

廿六日。まことにやあらむ、「海賊追ふ」と言へば、夜中ばかりより船を出だ
して漕ぎ来る途に、手向する所あり。楫取して幣奉らするに、幣の東へ散れ
ば、楫取の申して奉る言は、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめ給
へ」と申して奉る。これを聞きて、ある女の童の詠める、

31 わたつみの道触りの神に手向する幣の追風止まず吹かなむ
とぞ詠める。

この間に、風のよければ、楫取いたく誇りて、船に帆上げなど言ふ。その音
を聞きて、童も嫗も、いつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に、
淡路の専女といふ人の詠める歌、

32 追風の吹きぬる時は行く船の帆手打ちてこそ嬉しかりけれ
とぞ。
天気のことにつけつゝ祈る。

一「住吉」の上代の読み。歌語。この松は長寿を
保つて変わらぬ古松として有名。この歌、古今
集・雜上・読人知らず「われ見ても久しくなりぬ
住の江の岸の姫松らしく代経ぬらむ」を踏まえる。
なお、この歌と住吉の神詠で伊勢物語「一
七段の住吉行幸の章段が作られている。
二亡き娘の母。前の歌の「ある人」に對。
三葦草(あし)のこと。それを摘むと物思いを忘れ
ると言われる。住吉との結びつきで詠まれるの
は、古今集前後の貫之歌に集中し、彼の好みで
あつたらしい(小町谷照彦)。
四効き目があるかと摘んで行きたいから。
五まったく。下に打消語を伴う。
六底本のみ「わすれむ」。諸本により改む。
七恋し慕う力。万葉集・卷十六に「恋力」の語。
八思ひがけなく。
九戻つて、あふなく船を沈めてしまふさうだ。
一〇例のあの子さまだよ。物を欲しがる神の意。
一一当世風なことを言うよ。
一二一向に。下の「いや」はますますの意。
一三満足なさらないので。心が行かない(満足し
ない)ので船も行かない。と楫取の洒落。
一四眼だつて二つあるのた、たつたつしかな
い鏡を差し上げる。鏡は銅と錫の合金である白
銅を踏いて作つたもので、当時の貴重品。
一五途端に。突然に。
一六一方では、欲の深い神の心を見たことだ。
一七「住の江」は歌枕の地で「澄み」の意を、「忘れ
草」は歌枕の景物で憂さを忘れる意を、「岸の姫
松」も景物で優美な名をもつが、とてもそんな
優美な神さまではない、の意。
一八はつきり見えるさま。万葉語。
一九求められて投げ入れた鏡に映して神の欲深
い心を見た、の意。「かみ(鏡)からか子取
り(楫取)で「か」を取ると「かみ(神)」になると
いう謎解き(田基五郎)。
二〇神にかこつけて物を欲しがる楫取への皮肉。
二一五日は(一)進まぬ船旅のモチーフを受け継ぐ小
津の浦の場面、(二)好天にも不安がる童の詠の詠
の場面、(三)室老と亡児愛惜を述懐する場面、(四)
住吉の神と楫取の本心を暴露する場面から構成。
楫取の記事はここで終わる。表現上では、反復
表現や対句表現が目立つ。↓解説。

二 姓を記さないので二人とも前園守の従者か。
三 室言市奈良師。羽根より東約八は。室津と
の間は約一・五。
四 十二日から廿日まで室津に滞留。「室津」の語
感は岩穴を連想させる。この期間は「雨」
「月」の語が散見し、先の大湊滞留中と際立って
ちがう。その「雨」も、「雨降らず」いさゝかに
雨降る「曉より雨降れば」と変化してゐる。
五 知りたので。「べく」は意志の助動詞。
六 満月に近いから。「月」は女性の象徴か。
七 海の神は船中の女性に魅入るといふ俗信が
あり、それを避けるため。
八 と言ひながら。「て」は逆接。
九 何の悪いことがあろうかと、大して役にも
立たない葦の蔭をよらうとして。
一〇 ここではホヤは男性性器を、イガイ・アワビ
は女性性器を意味する。「つま」は連れ合ふ。
一一 着物を履まで上げて見せたことだ。古今集・
誹諧歌・藤原兼輔「いつしかとまたく心を腰にあ
げてあまの川原を今日や渡らむ」。
一二 女たちの水浴のようすを類似表現で戯れてみ
せた。室津滞留中は表現やモチーフによつて鎖
状に展開してゆく。十三日と十四日、十四日と
十五日、十五日と十六日、十六日と十七日が対

一 北東の蒲生田岬へ進むには北風は禁物。
二 海賊の情報が港に伝わって絶えず耳にされ、
不安はつもの。翌日の表現につながってゆく。
三 本当だろうか。この語句が前日の「海賊」
「ゆき」を受けていることに注意。
四 海賊は夜中活動しないため。卅日の冬参照。
五 航海の安全を祈つて、海の神に捧げ物をする
場所。蒲生田岬の付近か。
六 神への捧げ物。麻・木綿(綿)・帛(紙)などを
用いた。「たいまつ」は「たてまつ」のイ音便
で、ややくだけた言い方。
七 後に「申して奉る」と繰り返す荘重な表現。
八 使役。「す」「す」より改まった言い方。
九 海。「道触りの神」は行路の安全を司る神。
一〇 底本のみ「風よければ」。諸本により改む。
一一 挿入句。早く都へ帰りたいと思ふからか。
一二 伝未詳。淡路島出身の老女。二月六日の淡
路の鳥の大い御」と同一人物。
一三 女兒の歌句「追風止まず吹かなむ」を受ける。
一四 船の左右につけた張り綱。「て」「手」を掛
けて「手打ち」の意を、さらに「嬉しがる」の意
をも導く。船を擬人化し、張り綱が風に音を立て
るのを喜ぶ姿に見立てた。
一五 楫取が天候にかこつけ祈願するのを批難。
一六 前日の海賊の噂を受けて始まるが、「北風悪
し」をも受けて、それが好転する一日。前半は
楫取が奉幣して祈願し、女兒が和歌で追風の老
女。後半は楫取が願いが叶って喜び、淡路の老
女が和歌で喜ぶ。時間的推移のうちに対を構成